松浦記集成附錄

卷ノ一

圖書
文書係
第　號
年　月　日受入

048584.
0791
15縣
16=5
S 219
2

松浦記集成附録巻之一

目録

名護屋城并諸候陣跡之圖
松浦古事記之内小瀬甫菴道喜之説
高麗陣評定
朝鮮陣御用意大船之命令
同軍役之定
同掟條々
松浦古事記之内名護屋在陣衆ト有其中ニ地名官名
而已ニ而不分明分
朝鮮陣人数賦り
名護屋ヨリ各出船之軍勢
朝鮮国忠州城之事

図045

七項目…願ヒマス…願ヒマス
一、圖書ハ丁寧ニ取扱ヲ……
二、書中ノ紙ヲ折ラヌ樣……
三、指先ニ唾ヲ付ケテ頁ヲ送ラヌ樣……
四、墨汁ニテ汚サヌ樣……
五、鉛筆等ニテ書入レヌ樣……
六、大キナ圖書ヲ片手ニ持ッテ讀マヌ樣……
七、圖書ヲ又貸セヌ樣……

48584
0791
15縣
16=5

宰相秀家卿小西エ助勢
朝鮮王義州エ走ル
小西行長先陣
朝鮮王子ニ追掛主計頭働
秀吉公御母堂御異例
名護屋御留主在陣衆
嶋東衆
北國衆
裏御門番衆
西丸御前備衆
東ニノ丸御後備衆
御本丸大手御門番衆

同裏表御番衆
三之丸御番衆
御本丸廣間之番衆
太閤於名護屋御越年
名護屋御本丸御能
就テ千可相貴ニ水曽城御書上評議
水曽刑部城ー攻
漢南勢為ー救ニ朝鮮之急難ー参陣
朝鮮国船軍
加藤左馬丈感狀
蔚山城戰
加藤清正都表エ勢ヲ入ル

小西行長於平安道振猛威
三奉行諸勢引連都入

此図元記東西南北之正當焉其元図以紙十二枚而甚大也今茲作柏浦記集成其図元直曲裁長挾海引島而縮書之紙二枚以加記焉故其方有大同小異因而茲記元図之方也元図自本九四方正當如左

東正當横竹村藤堂佐渡守陣所

西正當串村杉若傳三郎陣所

南正當野本橋之川上大坂之頂以上

北正當加部島田島嶽之頂

又元図ニ記処如左

一名古屋在陣之勢貳拾万五千五百八拾五騎此内復々朝鮮ヱ加勢御渡被成下

一朝鮮渡海之軍勢拾万四千八百廿騎

一軍船高拾万石ニ大船二艘宛水主浦〻家百軒ニ十人宛

一諸國納米高拾万石ニ三千石但大船三艘中船五艘之積也

朝鮮國魁之諸將之內陣所不知分

一二千騎　有馬修理太夫
一七百騎　五島若狭守
一千騎　高橋九郎
一四千騎　戸田民部少輔
一千騎　加藤遠江守
一千五百騎　南條左衛門尉
一八百五拾騎　木下備中守
一八百騎　明石左近亮
一五百騎　別所豊後守
一四百騎　一柳右近將監
一七百騎　牧野兵部太夫

一五百騎　岡本上野介
一千騎　大村新八郎
一八百騎　相良宮内少輔
一千騎　秋月　三郎
一五千五百騎　生駒雅楽頭
一千騎　宮野兵部少輔
一八百騎　奥村左衛門尉
一四百騎　垣谷新五郎
一三千騎　中村右衛門太夫
一八百騎　服部采女正
一三百騎　石川肥後守
一三百騎　竹中　源内

一三百騎　高田豊後守
一二百騎　藤掛三河守
一二百騎　吉田兵部太夫
一百廿騎　大西小源太

以上二十七將

同後備之内陣所不知分

一百七拾人　中郷式部太夫
一百　人　生駒主殿進
一二百人　川尻肥　守
一百廿人　大塲典十郎
一二百人　矢部豊後守
一百　人　柏岡右京進

一二百人　服部土佐守
一百三拾人　生駒修理亮
一百人　溝口大炊亮
一五拾人　池田弥右衛門
一百五拾人　木下右京輔
一二百人　有馬　万助
一七拾人　川勝右兵衛
一二百人　間崎彦太郎
以上十四頭

同先備之内陣所不知分
一百七拾人　蜂谷大膳太夫
一三百人　奥山佐渡守
一四百人　池田備中守
一二百人　上田佐太郎
一三百人　羽柴上総守
一三百人　戸田武蔵守
一四百人　小出信濃守
一五百人　津田長門守
一二百人　赤松上総亮
一二百人　赤松下総守
以上十頭

柏浦記集成

○柏浦古事記之内小瀬甫庵道喜之説云太閤秀吉公既ニ汗馬の労功より登龍の佳運ゑ来り王政を守り行幸を成し奉り上下雍き和ひて東南ゑ雲治り西北ゑ風静まりて四海の外迄も幕下ゑ屬せさる所なし然れす中納言秀次公ゑ天氣を伺ひ関白職を譲り直ゑ新羅百濟高麗ゑ渡海し彼国を退治し夫より入唐せしめ旧功の者ゑ爵禄を厚くし異国の治法を見聞し吾朝の政務改め見人と思ふ也然るゑ予一人の計策を以つて其可否を定め難し五人の宿老（生駒雅楽頭。堀尾帯刀先生。中村式部少輔。）三人の小宿老（家康公。輝元。秀家。利家。景勝。）五人の奉行（増田右衛尉。長束大蔵大輔。浅野弾正少弼。徳善院。増田治部少輔。）等ゑ相議し其上

を以って相定むへしとふり去年夏東征の後中し其勲功
を募り権威雄猛の躰飛龍天を達が如し旧功の老臣諸侯
の面々も今も干戈弦箭物よしら弦鞆よして汗馬の労倦
を慰んと粗楽む中に此君大ふる志有る人なれも頼朝卿
軍の如き富士のまき狩のやらの事迄も思ひ寄しなさは
唐土に至りて軍労弦厭もさる氣象思ひの外ふる事也兎
角に蔭よりハさみもる者も有り又屈せぬ氣象のふ勇士
さる者も静ふ者時弦楽みくらは至き事にあらはと云つ
、感もるも有し也

○高麗陣評定之事

天正十八庚寅年三月九日五人の宿老三人の小宿老五人
の奉行衆大坂に仕候し登城せしかハ即不時の御茶山里
ふして給り急斯くて仰出さ者、趣も吾朝斯く平治せし
むる事各数年の勲功に因てふり興れも高麗を平地し能
く退治の上夫より入唐し教国弦領し功臣の労弦報し又
異国の政要を見聞く吾朝の改務の本を定め永く太平の
功弦立人と思ふも如何と損益衆議を請玉ふ満坐謹んて
誰も左右に譲り御返對も免角為さりしとさろ家康公め
はらしき御沙汰ともおハしはし候可然覧へ侍べる旨
仰上げられしかず秀吉公甚以て御機嫌より来る十五日
異国退治首途の祝義に饗膳弦給わり其後四位の太夫共
に能弦一こ被仰付肯まて何れも御暇給りけり

○朝鮮陣為御用意大船被仰付覚

一東も常陸より南海を経て四国九州に至て海に添さる

國〻北も秋田坂田より中国迄に至つて其国〻の高拾万石
ゟ付而大船或艘つゝ用意可有之事
一水主の事浦〻家百軒ゟ付而十人宛出させ其手〻この
大船ゟ可用候若有余の水主も干大坂可相越之事
一藏納も高拾万石ゟ付而大船三艘中船五艘宛造り可申
〻事
一船〻ハ用大形勘合候而半分〻通筵用奉行方ゟ請取可
申候相残分も船出来次第請取可申〻事
一船頭も見計らひ次第結来等相定可申候事
一水主一人ゟ扶持方二人北外妻子の扶持方遣〻可申〻
事
一陣中小者中間已下廿扶持其者〻宿〻〻遣〻可申候是
も此度高麗名護屋〻出立候者不残如此可遣〻事
右條々無相違令用意天正廿年〻春播州播州泉州の浦〻
〻令着岸
一左右可有之者也
天正十九年三月廿日　秀吉

〇同軍役之定
一四國九州も高壱万石ゟ付而六百人〻事
一中國紀州邊も五百人
一五畿内〃　四百人
一江尾濃勢〻四〻國ハ三百五十人
一遠参駿豆辺も三百人従是東〃何れ茂二百人宛〻〻

一若州より能州まで其間三百人
一越後出羽四五百人
右之分来年極月ニ至て大坂ニ可被参着候出勢之日限
重而可被仰出候間其旨宿陣不指合様得其意可申者也
天正十九年三月十五日　秀吉

○高麗陣ニ付而掟條々
一人数押出し事六里ニ一日ニ行程とハ作法在所ニ遠江
六里之内外奉行計ひ次第とるくきより即宿奉行定し
条前後無争論萬須路ニ可有之事
一旅宿屋賃も出し申間舗候薪秣等之代ハ宿主と相對し
出し可申候事

一津々浦々番等ニ有之者屋賃之義出し可申候鉄炮之者
等ハ義其主人より出し可申事
一泊々ニて扶持方馬之飼料令下行之事
一於しかひ狼藉追立夫其外萬非義有間敷事
一泊々宿々ニおゐて理不盡之義仕者あらハ當座ニ咎
め懸り口論ニ及間舗候其主人ニ假名實名能し記し置
其上を以て可相理之事
一何方ニおゐても徒ら者一揆徒黨ニ間敷様子有らハ密
ニ可為告知一度御褒美可被行之事
一里々ニ早道之者二人宛置之候而名護屋と大坂との
用事早速相叶候様可有之事
右之條々堅此旨可相守若違背之義有之者奉行人迄告

知可申者也

一文禄元壬辰年三月朝日より先陣小西攝津守加藤主計頭是を先登として毎日怠る事なし相続く其勢駿しき肝球国に計ふり断る先勢と皆うち行けれむ同十六日將軍都を立て打せ給ふ行列ふ法度正しき躰古今有ましき事ふん侍るとて見物の老若貴賤ま洋溢せり同廿七日より所備し勢日〻打続き卯月五日六日比に行しち如肥前国名護屋を発のみ松浦山夜姫ゥ唐土船数慕ひし湊ふり此所を旅館と相定られ諸侯〻勢兵を以てさしらへ仕り如恐軍勢ま扶持方馬の飼料其外水主梶取等ま至るまで四十八万人〻兵粮無怠下行〻事寔ま蕭何も及ふはしきまや思ひ知られさり

立て打せハ打立せ

○松浦古事記〻内名護屋在陣衆と有り其中に地名官名のみ記し分明ふらさるな

武藏大納言殿　徳川神君也
大和中納言　秀長
加賀宰相　利家
安濃津中將　信雄
結城少將　秀康
前尾張守法名常真〃　信長御舍弟織田民部少輔信包
越後宰相　上杉
會津少將　蒲生氏郷
常陸侍從　佐竹

伊達侍從
出羽侍從
金山侍從
柏任侍從
八幡山京極侍從
安房侍從
羽柴河内侍從
龍野侍從
北庄侍從
同舍弟義作守
村上周防守
濃口伯耆守

政宗
山形之主最上
森義作守忠政
丹羽長重
高次
里見
毛利秀頼
木下俊勝号長嘯子
堀秀治
月親良
越後村上城主
月国新発田之主

木下宮内少輔
同御後備衆之内
羽柴三吉侍從
同
有馬萬人

俊勝舍弟利房
織田信秀

有馬修理太夫
戸田氏部少輔
蜂須賀阿波守
長曽我部宮内少輔
生駒雅楽頭
久留米侍從

後号玄蕃頭摂州三田居住
朝鮮先鋒等内
島原城主
伊豫宇和島之主
阿波徳島之主
土佐之主
讃州高松ノ城主
秀包

朝鮮国都表出勢衆之内

郡上侍従　稲葉貞通
岐阜少將　織田黄門秀信　或云池田父子ノ中称歟
羽柴藤五郎　長谷川秀一
小野木縫殿助　丹波福知山城主

○朝鮮陣人数賦りと事

一陸の勢い小西摂津守加藤主計頭城魁ゝして徒く勢共
凡弐拾五万余騎ふり

一船手の勢い九鬼大隅守島津薩摩守加藤左馬助藤堂佐
渡守脇坂中務大輔久留島兄弟等ふり其勢三万余騎ふ
り

一船手と奉行い福原右馬助熊谷内蔵允毛利民部大輔
筧和泉守其勢弐千人

一惣大將い備前中納言秀家惣奉行い増田右衛門尉石田
治部少輔大谷形部少輔ふり

一浴中と仕置等い古田兵部少輔ふり

一是役皆同音ふて船を出しけり兼て名護屋ふして遂軍

評定諸事可相定との事ふれを文禄元年卯月十日発く
役所へ着し故九鬼い昔より事回りさ者船大将ふれい
大隅守船へ各寄り集り軍評定有り互に宜紀事共評論
し衆評一決し後其困めふくてい叶いさる事ふりとて
奉行衆起請文し前書を出し以外何れも被加思慮忠言
仕遣し可被申とふり

故白起請文前書し事

一船中軍評定し義各多分に自而其宜補をそだて可申し
事

一誰ふ船まふら以難義に及ひふへ可助成し事

一珍敷敵し行あらい孟子可申話し事

一忠節し輩深依怙畏負ふく有盛可申上し事

一他人し労伐盗み我手柄ふとも仕間敷事

一物見し疾舟一大将より二艘宛出し可申事

一名護屋御本陣へ注進仕候共奉行衆し加判まて可申上
し事

右し條し相違有間鋪候者逆背し義於有之者い畏大菩
薩愛宕山大権現し御罰可蒙者也 仍而起請文如件

卯月十日 各連判まて宛所い奉行衆ふり

福原右馬丞申れるい評議相調ひ其日出度事ふりさ
らい渡をものし船祝ひせんとて折二合樽三荷出しれ
り九鬼大可然事まさ然とて湯漬ふといとふみ種々の
肴役是盡て後各義酒まで成て何方ぞらるいしき触遊宮

さり伏度守千秋樂に民を接萬歳樂まい余狂延ふと舞
出て即ち座鋪を立まれり
○名護屋より各出船ゝ事
一先陣ゝ大將いわ西摂津守其勢二萬餘人加藤主
計頭二萬餘騎黒田甲斐守二万餘騎其外都合二十萬余
騎卯月十二日名護屋城辰の刻ゝ出帆し石火矢放し
立鯨波を上げ天地ゝ動もぐばかりふり
進ゝ壱岐浦を出て跡先城見繕い多くの大小船の敷くゝ
家ゝの紋付さる幕城打ち廻し思ひ〳〵の籏指物ゝて艪
りさてくかいに郡山の春を移し立田川のゝしきを海
ゝ流し入さるかのし実ゝ心も空ゝふり古郷の事も忘
れつゝ扨もと思ふ計りふり棹の音聲多の船中を感め
しゝ順風家心よけゝ吹き出し翌朝壹岐の勝本の湊ゝ
着まけるとかふせし間ゝ風かわり滞留せしかとゝ
十日余り碇をもおさへりしか卯月廿五日の暁わさ
風少し吹よわり如志かいあれゝ名殘の波荒ふして海
上いまゝ穏ならぬふ西思ふやう海上おさやうに成り
ふば何きの船ゝ出あん向ふ風て有らハさやいざ漕り
見んとて夜半の頃船城出し對馬城さして急きけり翌
日午の刻迄順風ふりしゝ依て對州豊崎ゝ着しふる、
りの船とゝもに西か船見へさるゝ驚き急き船城出せゝ
ふと旬ゝ西ゝ其日ゝ暮ゝく午時ゝ帆ゝ上り如兎や角とし
て船城出し五六里ゝ延けらんとおほしきゝ又逆風に
ふつて勝おへ戻りけりわ西も豊崎ゝ着岸せ甲斐も

もふく逆風をのうみ有り不日空の氣色御変りしかい
船を出すべき用意して待居ぬ、卯月廿九日の刻過上
り穏あらはと船を出し釜山浦へ着とひそしく打上り
所を押移らんとせしに敵二万余騎矢幅を作て待
かけ射るを以て鉄炮を以つて打くめ押出るに入
り終に二三の砦へ追入れ水陸を尽しの刻に余捕り
上下八百五百人接伐りに討取りお生捕の者
二百余人即此者に通辞を以て近邊の様子を問ふに是
より三十里成変に当て東策と云城ありと答ふ小
西是を聞き諸士に向つて云ける い今朝盡粉骨無比類
働き尤大切也然る間今夜い宿に休べきなれとも此落
城を先年の成として行をかへ用心厳しく志てんや速

も他の勢に渡さへき事しまあらはいさ東策を攻捕他の
國の名城を一日の中に二ヶ所攻ほし多くの敵を討捕
日本へ注進し殿下の御感を頂らんやと聊たゆむ氣色
も見え共御けれも何もさらさらのに回しれりさらい
下と急き其用意せよ馬の飼料をと能きまさしらくよ
て其以後に及び午の下刻まうち出東策にむりて嘆
と雑波を作り所を打破らしかい釜山海の城諸勢を
接伐りに志はるあや怖けん防き戦いんとせに悪く
首行おけりお西を殿以水に作た術門尉ふと手勢引連
追かけ首九百余分取をそし其夜い東城に陣をを人
馬の息を休をれり其後志州に敵多勢まて在よし小西
承使通辞に使り敵の様子を尋ね待るに若左のごとし

○忠州城之事

彼城守護せんとめに忠州城とて地の利金き名城有り
剛兵の將數人軍勢六七万騎籠置能き方の達者數多相
籠兵粮以下能く入置都より專ら此城を頼みとし心強
安んじ粗静ふるとそ通報申け數

○備前宰相秀家卿小和を助成し衆を越渡海之事

さる程に小西摂津守いまい勢軍勢を先立て渡海して
釜山海東萊之両城を攻め落し振猛威軍甚し軍掛の
次第を見るに秀家いハ番目ふり小和か先陣城秀家心
元ふく思ひ家老之者共呼び集め評議有るいハ和か
先陣板舞ふり孫之深入して討死ふといたさい將軍
の御為と云ひ某久之目を慈付りし甲斐をふしいさ敵

ひてしよと有りしかい各承り是れ義の在所なれハ
しまし假幸ひ今夜い海上も穏かふり船城出させ玉い
くやと申上しかい秀家船奉行共呼び出し窮かる此
儀を忍ひ出釜山海へ急假へ誰かれと此沖を宜め敵白
艘の船を押出しけれい程ふく吹風いと心よけ吹出
し夜もおし明のとき釜山海へ乗り込小西か家来城番
を動在しかい羅出御後海の祝儀あいつくろひけれい先
摂州忠節の様子さ出やかる様し假へと有しかい有の
儀ま申上けり秀家御玉ふて物て年比類働かふ誰あり
て小和ま商城並ふ敷清度あらんや某参陣せし由飛れ
をきたへきし条案内の者を相除假へとて

卒飛羽檄伸微志了今度其表無比類御手柄宣可為御

當家無二之忠功候某令越席渡海之義其方先陣無心
元存今曉至釜山海明日其表令參陣萬事可申談候条
不詳候恐々謹言
五月二日　秀家
小西攝津守殿

攝津守は秀家の書簡くりかへし拝見不斜悦びつゝ思事此上
やあるべき寔に千騎萬騎の力といふも斯様の事なんと云ふばや
と笑み合んで喜べり加藤主計頭は小西に先陣を越され
し事を無念に思ひ攝津守が進みし跡を打んと心らき
事に侍る熊川へ船を着け陸へ上がり小西が事を聞へも
斯なん答ふ主計頭承り深く怒りつゝ今日までは先陣

人なまさきなましものをと日本勢大略渡海有りし由東萊
へ追進せしかは小西思ふ様忠州の城をも兼捕除抽忠
勤せやと弟なで待る主殿助木下作右衛門尉なと呼集
御勢悉く渡海し諸勢今明日には参陣有るべきとなり
いさ明朝忠州の城を思ひ取べきと思ふは如何、有べ
きと云ければ何れも尤なりと急ぎ給へとてひさしと用
意し戌の刻に打立漸く丑の刻とおぼしき頃城の麓に
押寄り噂と鯨波を挙しかは城中寝耳に水の入さる
如く驚きあへり矢炎向なとをも塞き妄りに執鞭我先に
落なんと為させしなり斯る所へ攻登りしに窮鼠却つ
て猫を噛むあらひまや有けん多勢の中より五六々騎
弓鉄炮合せ鎗長刀を以て防き戦ふ事甚以細し小西思

ての者として伊賀の者百人有りしを半を分て城の後へ廻し山下に焼立しかい敵度を迷ひ出るをけり弱兵かち多る癖として退立る勢い一段せさるものなりしかは且裏崩れしとりけれい防戦ふ勢共もや後を見せ前弱ふ成とりしかは我わ馬印を抱りつゝ一揉もめや者共と て敵陣を奉打会せとかれい到弱共ふ上を下へと争ひ落る躰我朝の苦一の若の落足も出やと思ひ知らきさり味方い得とりかしきしと割入込入り数こを切て搦城をらばひ取り陽動陣を奉計捕し首を集め秀家公へ持せ進ぶ出州城落出せしを由都へ聞へしわい老臣と面ら話して日是ふ裏滅せしを時至りを敵近付さる已前ふ寄器をも退けまいらせ其後御敵ふ大を放ち煙の紛れふ何方へも忍いせむひ可然おいさしやと諫め奉きい上下此義ふ同し上奉我風輩ふ集せ奉りかと計の偽奉しく触ひて物淋しく斯く殿の田原由裏ふ火を放ちけれとも焼立しを対未至るや焼さりけきいさとしく帝の御跡を暴ふて退ふけり宣ふ年久しく住ふれし都を捨搦おのかさはしふ分れ行形勢中こふ物ふさくて哀ふ君我跡ふ見るをあり先立まひらにるを有り親いふ我尋ね子い親の行衛ふさりるゝを有り日本廣徒ひし儚兵聲を限りふ頼みしく人をいはちへ迷いせむふらしと呼聲ふや有ける其さ場いと哀ふりまさ老とる父母の手を引我子を負ふて迷ふを多し父母を弟ふ度しを見も自君の先途を助るを有て哀さ絶入ふけりふり

○朝鮮王義州へ蒙古帝より
天子の弟之宮様四国道有て義州城さして攻させ給へ
ハ二男の王子いかいして後れ玉ひけんやうあん通さ
して蒙古ふ彼の国の宮人二男へはまひうせし老母まて
有しかるへしと密内者云けり所分け哀なる強情なも
有るハハ戈九郎の稚か書籍をごきかく〳〵是ハ中芳志あ
きかしと云林ふ見へ伝るを心有るものゝ明るや有けん其
児の脇差勝るる故即ち取て書籍をも日本へ帰け度しは
ゝ親しく撫育せしとふん

○小知行長都入る事

思州の辰こゝ方ま来つて廣野有り此ふまして都入りく
評議せんとて加藤主計頭四国遠江守黒田甲斐守鍋島加賀
守等博多右衛門尉石田治部少輔大谷形部少輔ま相理り
小西摂津守方へ書簡送しけれい五月六日ら朝来らし
故話有けるま都入る先陣いま計頭とるへしと思度計
ふけま云出ま小西行南て蒙国の先陣い日ま待て所望ま
被第候条今更私ま定めら此れ事所法ふきま似さり一向
後る同様ら言葉を故て申けれ主計頭とまれかしまき先
陣い手柄治第ま せんとて既ま四士軍あらんと見つ如加
賀守さし出て勿論先陣い小西殿まて有けめど三ヶ所の
城を唯一人の手柄まてかづき被申し上い都入の先陣い
手を分て沙汰し玉ふて冥しくかるへく覚へ候と云けれい
小西理ま服しむま去ぬとて都入る街道二筋ふれ有り候
南大門い行程百里計りまして大河有り東大門い百有余

里遠く候得共川無しけれども大山い多く有る由南へ待る何きまても主計殿好次第さるへしと申けれい鍋島も
おと殿しやかまおいしまほと感しつい主計殿へ左旨如
と有けれハ大河有りとも近き方より入りふんとて則南
大門さして急きけり小西い寅て生捕の中二百余人山川
まを達者ふると新の案内まよし有志を助け置き能きまを愛
しけれハ為の自由を乞しからハ此中まて川まハ口切とる者を
二十余人主計殿向ひれる大河まをし近邊の船共を流し
接まけり加藤ハのやらの事をい聊も不知急き行程大河
まを着けれまハ川中十余所まよして淹成て冷はしの事ま
れい無や有と川まを登りて見下りて見き共舟一般も形
し若渡船や有と三里上下を尋させ待りしのとも無かり

けれい其日い空敷河邊まを石陣しけりわ西い五月十日ハ
辰の刻まを新まを至て見きい東大門をはし固め入色きやら
ふしまを防き戦いんとする勢も見へハ然れ共四方石垣高
くして門の高き事十間計りも有しかい中ハ入難ふして
立さらけり兎やせん角やせんて勇ふ兵まおさのしき者
ハ城内の脇ふる水門より先五十人も百人も入て御覧
有きかしと云しまさそ口い付てけき志のいあれと五人
四方の水門まを鉄を於の入能まを格へ有りけれい心はのり
を入りあ所る所まを木に作右術門仕やふらそ有れとて鉄
砲の玉をもづし簡まてすわ起しへて門の扉を開まけ利
小西大の眼をいからしぬけかけ来ふ乱妨を面からさ新
手家まを入らされて下知して軍法堅くものし法り反って

ものやの合戦を四方備くはい、入て其仕所尤よし

評曰大内あきはるを幸ひ多くい礼を入りるんは
空き法を云出軍法正しくして都入りせしい一廉と
宴は泉州堺の地下人如清か一ふとして断有しい尤
長有る勇士ふらんも敢永禄の頃まふ鉄を実し人さち
いおおあれとかやうの時ちいまりこのくり法能く
して入り異国は佳名あらしい稀ままや

かくて洛中の躰を見るに人実まふし内裏は入て見れ共
監士宮門を守らされい物寂てれり山西先つ外朝は在て
我勢を宜く賦り置四門を尤固め番等綱く法はし置き翌
朝は計頭か先手に勢進み来て門城元はよと云く時是い
山西都入に先陣して大門を固め有りしに用事あらい五
三人い入直しと云ひしかい立帰りて如と告如加藤打間
て以やく都へ入りふい所しかりふん大王い退給ふ由
ふれいせめて北行御を追見人と洛外は在て其さ内おさ
やかふ利

○王子城追掛奉る事 計頭働に事

是計頭い洛中評議の負ふ尤成れ王子城追無捕へ奉人工
天を賞し謀反城呼集あ計れるい都入りに先陣い集せん
と御法を尤攻り進けしか共大河は碍らき山西は越きし
事無念の限りふりせめて子を追し怒と思ふふり明
朝出ふい遠は落延玉ふへし亥の刻は出へきふり其用
意何ふ付へし門らの室内者五人召連へし馬具等い好
次第は決法して強あらん馬城度し労せさるやうあ心城

M48584

除よとて奉行を付おけり其時は也及い人頃庄林隼人祐
を呼て窮まるや用意せよと有しかい下こを起し廻りい
らてくかい断事調ひ亥の刻剣を忍出　へと急きけ
る程に夜の中は二十里を過ぬ赤は在りし人こを汁頭陣
所に暮行向は清正い夜半はかくと答ふ答奥さめて偖て
もあきは無ふると感れるもの有りやあきれるふと恨むる
も有りを汁頭召連し案内者知る方は付て又案内者を求
め進発行けいをふい　其の影はおいしはし玉ふと
く請正天の供ふる幸かふと悦ひはく取て所りけ弾炮
を射入れ打入を喚き叫んて攻入んとひしめきたのへりぬ
城中堰兎ねて和議をを信ふを汁頭甚求る應しはく二男
いちふ十七歳を成玉ふと共外宮人百余人請取奉る清正

も供奉こ数を加りて所泊をこ所所を営み入きまひらせ置
豊臣将軍へ其旨注進有りしかい橋懐方ふられして
吉之こ昭義黄金五千両賜下けり

○秀吉公就御母堂即異例一所上こ事

去程に数下こ御母堂大政所い御歳八十七を長けさせ玉
ひしか秀吉公ふの国へわさらせ玉ふをやとかはし饗
ひせ玉ふ可しはき奉る人こ以やとよ肥前名古屋と云玉ふ
おハしはしは諸度古夫をのみさしたし玉ふより御
義くきとをくよくさめ多てまつるとりくとも夫
をけまとおばさけ六月半より例ふられ見へ玉ひしか日を
おひおとろくさせ玉ふ秀吉公より　やみの事毎を苦させ玉ひ
し御せらはを以よく祈ふく間へさせ玉へい秀吉公
此御母堂かれい二とひ気き御事ふり御息のかよわせ玉ふ

内ゟ今一さゝび見さてまはりをかて立帰り勢さまわんと
てされかれ御為重の御事家康の利家ゟとくおゝせな
のせらき七月十日をゝ暁かこの出ゝはゝ内船ゟ召まし上
らせ玉ひゝ内臨在陣衆務侍ゝ番不先の如ゝ

○名護屋御留主在陣衆

大和中納言　安曇津少将　伊賀侍従箇井頁次
江州八幡侍従　龍野侍従勝俊　森右近左大
藤堂伏度守　浅野弾正大弼　浅野左京左大
村木河内守　山川土佐守　木下宮内少輔　勝俊弟ト有利房之
水野和泉守　伊藤長門守　伊藤弥右
生駒隠岐　稲木伊賀守　仙石権兵衛
河原長右衛門　石川出雲守　羽柴河内守

吉田又左衛門　根野織部正　伏屋小兵衛
伏屋飛弾守　西川八左衛門　伏久間河内守
水野久左衛門　滝川豊前守　伏藤駿河守
鈴木孫之助　鈴木孫一郎　大塚典一郎
錦島伊平左　落合藤右衛門　美濃部四郎三郎
吉田主水正　蜂谷市左衛門　安藤次左衛門
石川兵蔵　南部弥五八

○関東衆

大納言家康卿　會津侍従氏郷　宇津宮弥三郎
佐城少将秀康　伊達侍従政宗　成田下総守
伏竹侍従　北条修美濃守　北条助五郎
出羽侍従　真田安房守　小川治部少輔

安房里見侍従　真田原三郎
秋田右近　北条
南部大膳太夫　内越宮内少輔
水谷伊勢守　高座大次郎
滝澤又五郎　田里衆四人

○北國衆

加賀宰相利家　柏任侍従長室
上杉宰相景勝　溝口伯耆守
羽柴美作守　姫氏　青木伊賀守

○裏之御門番衆

一番　有馬中務卿法印　大野木甚之丞　二番　石田左頭　太田和泉守　三番　長束大蔵大輔　芳賀観音寺
四番　寺沢志摩守　御牧勘兵衛

山野寺孫十郎
伏野右大夫
那須衆
六郷衆

○西の丸御前備衆　十五人

富田左近将監　六百五十人　金森飛彈守　八百人
蜂谷大膳太夫　百七十人　戸田武蔵守　三百人
奥山佐渡守　三百五十人　池田備中守　四百人
小出信濃守　四百人　津田長門守　五百人
上田左太郎　二百人　山崎左馬允　八百人
稲葉兵庫頭　四百七十人　市橋下総守　二百人
赤松上総守　二百人　羽柴下総守　三百人
間島彦太郎　二百人

○東二、丸御後備衆　二十六人

別紫三吉侍従　三百人
吉田織部正　百三十人
蒔田権佐　二百人
生駒修理亮　百三十人
潜口大炊介　百人
池田孫右衛門　五十人
木下右京亮　百人
有馬萬人　二百人
寺西筑後守　四百人
時政郎兵衛
竹中丹後守　二百人
柏岡右京進　百人
氏家志摩守　二百五十人

長束大蔵大輔　五百人
山崎右京進　三百五十人
中江式部大輔　百七十人
生駒主殿頭　百人
河尻肥前守　二百人
大塩孫一郎　百二十人
矢部豊後守　百人
寺沢志摩守　百六十人
福原左馬助　五百人
長谷川右兵衛　二百七十人
川勝右兵衛　七十人
氏家内膳正　百五十人

寺西勝兵衛　二百人
右一日一夜宛無懈怠可令勤仕者也
○御本丸大手御門番衆
一番　服部土佐守
三番　建部寿得
○同裏表御番衆
一番　中江式部大輔
三番　石田左頭
五番　石川備前守
七番　長束大蔵大輔
九番　蒔田権佐

服部土佐守　百人
二番　垣屋駿河守
二番　山崎右京進
四番　長谷川右兵衛
六番　寺沢志摩守
八番　服部土佐守
十番　福原右馬助

○三之丸御番衆　御馬廻り組

一番　石川組

石川紀伊守
金森掃部丞
浮田喜藤次
滝川助太郎
坂井彦九郎
水野原左衛門
土肥　久作
宮村清三郎

土橋右近將監
田尻勝八郎
中村　七丞
森村　三平
丹羽源太夫
真田原次
水谷次右衛門
平井金十郎

依藤平丞
今枝勝七郎
雲林院忠丞
坂井理右衛門
諸合新　三
山中五郎作
上田勝三郎
立野孫十郎

二番　中島組

中島左兵衛

青山勝八郎

齊藤新五

村上太郎兵衛
小沢喜八郎
栗原勝丞
宇野傳十郎
薄田傳左衛門
郡　十右衛門

長谷川宗次郎
萱野孫三左衛門
池山新八郎
水原彦三郎
長坂三十郎
河原勝兵衛

坂井平八
吉田彦四郎
塩野屋宗四郎
矢野十左衛門
高田原十郎

三番　長束組

長束次郎兵衛
赤座三左衛門
一柳　左
山名市十郎

木下小次郎
坂井平三郎
大谷次良右衛門
安見甚七

津田新八
河副武部之丞
石村数馬丞
廣瀬加兵衛

日比野小十郎
五十嵐小重次
山内角藏
薄田源太郎
山田平三郎

矢野原六郎
長江藤十郎
堀猪左衛門
柘植次郎右
安西左傳次

岸久七
山口三十郎
田中藤七郎
田中三十郎

四番　宗原組
宗原次右衛門
多羅尾久八郎
平野新八郎
前田与郎次
伊知知典四郎

松若藤次郎
村井吉兵衛
平野九郎右衛門
桃原兵七郎
森権与郎

木曽八郎七郎
保田掃部助
越知又十郎
河田九郎右衛門
芝木清藏

大庭五郎左衛門
芝木平吉

中川長助

生熊丹左衛門

五番　中井組
中井平右衛門
柘原五郎兵衛
森田九一郎
小原吉七郎
宮田三左衛門
薄田清左衛門
荻木与藏
吉田又七郎

多賀長兵衛
小出孫十郎
小嶋与右衛門
山名勝七
安宅原八郎
赤座義八郎
伏久尚英助

清口傳三郎
荒川助八郎
石川長助
石辰典兵衛
矢野九郎次郎
柘植金平
加藤小助

六番　塩田組

塩田國書之介
野々村次兵衛
伊木　平七
山田雲兵
甘糟豊三郎
寺島久太郎
吉田市尾

上條民部右輔
宗右久三郎
賀藤清左衛門
井上彦之
大山勝兵衛
矢野久三郎
國甚左衛門

○御本丸廣間之書衆

一番　伊藤組

御馬廻組

村瀬宗七郎
大津久兵衛
栗山市尾
山本加兵衛
林猪兵衛
村瀬新八郎
栗屋弥四郎

伊藤田後守
稲葉右郎左衛門
必田義右衛門
園村弥右衛門
三上大蔵之丞
三牧右郎左衛門
吉田治兵衛
高橋弥之郎
竹内庸介
山口藤左衛門

津田少兵衛
水谷又左衛門
上原治郎左衛門
那須助左衛門
小栗助兵衛
塩井助之允
三村九郎左衛門
清水弥左衛門
吉田彦八郎
杉井新介

栗原彦八郎
長坂弥左衛門
村田將監
藤堂勝左衛門
津田新左衛門
尾崎喜介
多田勝五郎
栗田弥五左衛門
村上兵部丞

二番　塩井組

匝井九兵衛　　袁宗兵衛
三好新左衛門　　三好為三
佐々嘉兵衛　　生駒孫九郎
稲吾兵十郎　　石川忠左衛門
伊藤長兵　　生駒孫介
能勢宇右衛門　　林藤兵左衛門
跡部伊左衛門　　宮島甚五左衛門
生島伊十郎　　飯沼左右衛門
林長兵衛　　林助十郎
林喜兵衛　　渭ヒ新介
寺西平左衛門　　ヒ宮善兵衛
匝井次左衛門

三番　真野但
真野藏人　　赤松招次郎右郎
堀田ヒ左衛門　　赤松伊豆守　　木村藤介
津田少兵次

堀田権八郎　　塚井新左衛門　　平塚因幡守
阿北善三郎　　乾　彦九郎　　佐々木権左衛門
小崎新四郎　　今井兵部ヒ　　真野左右郎
杉木ヒ兵衛　　太田ヒ平藏　　堀田新介
平野甚介　　清水喜左衛門　　平彦作
桐木新ヒ　　具塚五兵衛

四番　佐藤但
佐藤隠岐守　　伊丹兵庫頭　　赤座弥ヒ郎
小笠原左京大夫　　上野中務少輔　　安部仙三郎
河村留書介　　長谷川甚兵衛　　飯沼金藏
大屋郎三郎　　福富年兵衛　　竹腰三郎左衛門

河村彦之
大屋三左衛門
安見朝五郎
黒新長兵
吉田宗四郎
柳津九郎左衛門

五番　尼子組
尼子三郎左衛門
進藤新次郎
永保孫左衛門
山岡修理亮

佐藤孫与郎
余田源三郎
寺田宗左衛門
青木善左ヱ門
寺田新兵
飯尾与左衛門

寺田孫四郎
佐藤助三郎
吉田源之郎
飯尾二左衛門
橋本九左衛門

春日九兵衛
東条紀伊守
河毛次郎左衛門
上田勘左衛門

中村掃部兵
高橋三左衛門
井上新兵
野間久左衛門

岳村典八郎
後藤九郎左衛門
林田源兵衛
河毛源三郎
加藤弥平太
伊藤平左衛門

青木左京進
水原又ゝ進
梅原伯左衛門
斎藤吉兵衛
河副源次郎
野間長次郎

三好助兵衛
四郎新小僧次
河毛勝次郎
田郎新左衛門
荒木助左衛門

六番　速水組
速水甲斐守
白程三郎左衛門
宣野左吉夫
山坂助六

佐藤孫十郎
白程主馬兵
渡邊平左衛門
佐ゝ長三郎

大間甚次郎
本江左左衛門
山中又左衛門
北村宗左衛門

千秋又之助　山内善外　佐々十左衛門
山内左衛門　藪田伊兵衛　竹内孫外
兼藤左衛門　赤威僧左衛門　篠原又一郎
青山助六　兼村左衛門　鈴村与三左衛門
宮崎半四郎　小村五外　南見孫外
右一日一夜宅等怠慢無可令勤仕者也

文祿元年
七月廿二日　御朱印

御毋堂大政所御異例日々衰へさせ玉ふに因て醫師衆評々上其験を尽さるく申上しかハ毎日御注進有り將軍い御氣色の様子被聞召御机ハ近はりせ玉ふまゝとて七日二十二日船頭明石與治兵衛を召出され分度御上洛被を日々絶急思召問精を出し水を已下油断なく申付へく旨被仰付名護屋より直ち御船ハ召きけり其頃毛利右馬頭輝元朝鮮在陣せしか長ふ在京大夫秀元い幼少故在國し名護屋へ御見舞として参上仕ぬ秀吉御御氣嬢まて則上方へ召連られ新へきの御上意まて御船中供奉のさ迄御船まて守護し侍る為り然る處秀吉御の御座船豊前の國大裏の沖組板波と云雑所へ向ひしかハ自然御大事も可有之ゝと右京大夫心を付け船材急ける所ゑ密の如く彼の所へ案内御座船雑義ハ及ひ過半沈水に秀吉御御一命御危く見へさせ玉ひ數艘の御供船周章て騒く其時右京大夫の船を御座船へ案内御移り假得と申上る秀

去御御機嫌まて則秀之の船へ御移り有り此時右京大夫
を宰相まゑ位ぐられ御聟まゑ可被成と御直まゑ御約束御怒情
の御感斜ならず初船頭明石兵次兵衛を召出され唯今の
仕合以ての外と御氣色宮き所仰わて使し申上候い此雜
不義ぬて承り及ひ其中國中悪く御敵まゑ嚴成候
由承り申候間吉のひのひを待ひ御船を上せ申と存候
内まゑ如斯と候て申上しまい秀吉御内意服の餘り中國敵
の船まゑ乗移り一命を助かるは偖と言語まゑ及ひかさき申
候かゑとて則内裏の濱まして船頭まゑ次兵衛の首城刎
られけり彼御を已後兵次兵衛と申者まゑ斯くて書意
分さけ名かせ玉ふ程まゑ七月晦日まゑ上着し玉ひ使く大
政所へ入らせ以かまゑて向い申候いもや廿五日まゑ薨

し玉ふと申上ぬると等敷絶入り玉ひてけり醫師等御藥
を進め奉れ共おはかふきさまして まゑ御涙を見
へ玉ひあきれさせ玉ひぬまゑ有て御泪志ゑ止ま
らさりき斯くても果ぬ御事あれば先廣間へ出給ひて御
けるい御最期の御暇を不申事を思ひ給ふ一入殘多く侍るとて揚返し
悔玉へ其甲斐そなき御服納の事大徳寺へ出旨被仰出古
今伝揚ふる例まのせ吊ひ奉り度由徳善院玄以を以
て玉伸 和尚まゑ被仰付けり依之善美盡しとる事
申まゑ及れ候を後又肥前國名護屋まゑ御引せ給ひけり尤
九月御下向ふり

○大閤於名護屋御越年ノ事

思いさらめや克埃矢の如しと文禄元年も御事繁き中ま
給れ暮れて都までの歳暮まい事かり目則ねさま多か
りけりとか[illegible]匂る由ま鶏旦の祝音を唱ふ賞と若れ
出て初音珍らかあり御前ゆ弥目出度きの春みて寿きの
義ま将ま静ふられお前城州八幡山の暮れ新九郎年歯
御祝儀申上候いんとて名護屋へ下向せしかい御機嫌斜
ふられ敷下みづから御能をも御稽古有て御心ねもとめ
ささ殆ひ又い在陣の衆士ま慰めんとふ思ふ　とお屋
さてふく云かとしけるい御年も御耳炎ま近はせ給へい
ねうとくい止玉ひふい国出ときま事　まふん待らんと云
ふま有又咲みを含みてさみし　侍るま過年ふり始の程
い山里まふて御伽衆計被召連御稽古有しか御仕舞の

まーあしを不包有やうま申せとの御設ふり新九郎教く申やうのは
まーくーさ咲みしき一かさふらい多ゆまや表向まてゆのー給ふとま苦
く侍るまーき由暮れ申上しかい其さは冥しかうん事を強て思ひけるま、
そと宮ひつらい情八天下を治め民を安んぜる能ふれい御稽
古有しか殊の外宮ーく侍る由のみまて有りしふり五十日計の内ま十五
六番覚ゝ玉ひしかやかて舞芸まて被遊候やうまと新九郎申上けり日
数断ゝ積り御稽古の程ゆ重り仕廻ゆ少ふま病ふどのひやうふれい
見る人とかう申ま及いまぬ事まて有けるよとて感しあへり暮れ
い金銀御服ふど夥ーく拝領有諸侯太夫衆と一方ふら始とてはやし
ふれい門前賑ひにまけり今春太夫八郎親世太夫左近被召寄御能御覧有へき
とて飛力美登されけれい二月下旬為人名護屋へ下着せり其ゆ
拝露有しかいま翌朝御目見申せしま下向の程油断ふかりし

よと御機嫌いみしく美麗なる物一玉ふ今春家の名物の面。小おもて。はんにゃ。小尉。三光の尉。秋世家の名物。如石ひなおて。赤色尉。あふみの女小べしみ。
あどらはさせらき度与内内くまて御不望有しかい
稀しゆまる及いれ如事まや有けん別面を上まる共切
山城宇治郡醍醐ま角坊とて面ちとうはしゆ伝うて長教
の名人有則君下し写寿る屋き与水下平外を以被御
出しかいナロ計りく面ま五つ出来しく上寿る内一覧在
ゆる何きか床何きか写しとも見へわかまるまよう御感
鉾ちらに移しの引出物銀してけり残りの面共ま
出来しく者れい面の天下一ま御成与おはされて家康
利家ちとまいかい有へきと内ひ玉ひしかい尤宜しくな

きしはきへしと申上られけり其夜召出され銀子五十
枚天下一号ふ面朱印給いられ如角坊の仕合とかう申ま
及いれに断能ま好き伝ひしまま固て名物の面共多集り来
るふ大方事とも与

○文禄二年三月九日　名護屋御本丸　御能しる次第

一　翁
千歳振　大蔵伝
さんいさう　大蔵彦蔵
みみ出し　大蔵平蔵
とうとう　幸五郎治郎
一番　高砂　古式　今春八郎

わき　今春原左衛門尉
つき　長命甚次郎
大はゞみ　大花　平花
小鼓　幸五郎次郎
笛　長命吉左衛門尉
ちゝ鼓　今春又次郎
あひ　大花江左衛門尉
狂言　長命甚六
ちゝ夫　大花亀　花
たはゞみ　今春八郎
わき　植口見守
今春原左衛門尉

二番　田村

小鼓　観世又次郎
笛　長命新右衛門
あひ　大蔵亀蔵
狂言も形とり大名　弥右衛門
同　相撲今参り　甚六

一三番　松風
太夫　今春八郎
わき　今春源左エ門
はゞき　竹俣和泉
大はゞみ　植口石見守
小鼓　幸五郎次郎
笛　八幡助左エ門

あひ　長命甚六
狂言釣きぼり　祝弥三郎
あと　甚六

一四番　邯鄲　太夫　暮相新九郎
わき大臣　春藤六右エ門
大ぼゝみ　かふや甚兵衛
小鼓　いやゝ子次郎
笛　長命吉右衛門
狂言宗論　大蔵弥右衛門

一五番　導城寺　大夫　今春八郎

わき　竹侯和泉
大ぼゝみ　大蔵平蔵
笛　長命吉右衛門
狂言　弥右衛門
小鼓　幸五郎次郎

見物ら諸侯より太夫ホヘ折ふと被下御土器めくり玉ふ
大夫并座の者共御服被下早八郎ゟ小唐孫菊の御紋付
さる御小袖二重之

一六番　弓八幡　大夫拝領の御小袖を着し罷在御祝
言を仕候之

一七番　三輪　太夫　今春八郎

わき　春藤六右衛門
大はゝみ　大藏　平藏
小鼓　観世又次郎
笛　長命新右衛門
太鼓　今春又次郎

一八番　金札　大夫　今春八郎
わき　今春源左衛門
大はゝみ　大藏　平藏
小鼓　幸五郎　次郎
笛　長命幸左衛門
大鼓　深谷金藏

以上

○就下千可相責木曾城一御書上評議之事

態と申遣候

一赤國木曾判官卒二教義一騎一度く差出相防都表在陣之諸勢与二釜山浦之通路一之由より付而長岡越中守木村常陸介長谷川藤五郎其外大夫十餘人都合其勢三万餘騎到二赤國一可二攻平之旨申付之所即令二発向一雖二取囲一彼城木曾勢遂ニ信せしよりも不二遂一本意一退散之義不及二是非一候

遂ニ義ヲ欲

尤も有度きもらい愈て発向之仕しきふるを浅慮之義不二相届一者歟不二文一於二勝敗一非二良将一是古人之明言ふれい令二赦免一之事

一今度都表在陣し勢不殘引拂ひ至彼國令進発一森國
を攻平ケ木曽か首城為見可被申之事
一都表引拂事兼赤國可被平事　何茂黒田如水弾正少弼次第進退有之假為甚両人差遣し事
右之條〻相守此旨萬事宜様可令沙汰者也

文禄二年
五月　　秀吉朱印

朝鮮國名在陣之衆中

黒田淺野両人印を以都へ参陣し越朝都在之備前宰相
殿三奉行衆ゟ之以書状之
無為飛羽撥伸　上意了柳某等両人参陣し事其
表所在陣衆悉く引拂ひ可被攻平木曽城之旨御送假
無者弟締備前宰相殿指國次第引拂ひ東策表
ゟ至て所帰陣ゟ假殿而遂而渡一而申送候得共諸
事為可所意得先以飛札申達候恐〻謹言

六月朔日　　淺野弾正少弼
黒田如水軒

増田右衛門尉殿
石田治部少輔殿
大谷形部少輔殿
名護屋中

北條弾正ゟ外達者ゟ在し故十日路ゟ不を首ゟ参着

せくかい 各及按見即其晩中納言殿く参り此方斯と申達
し在陣し而こ呼集め及評議明朝可引揚ゆ相極け り帰陣
こ次第い初備前宰相殿其次大夫衆殿(しゅう)ていい輝元こ先勢二
萬餘騎加藤主計頭黒田甲斐守西摂津守かりし勧め
候いんとの事ふく彼ら夜もしらみしらりい夫家を先退事
り其次三奉行如此殿こゆ引揚ひしり其敵慕ふへき行も
無けれい後こ及帰陣けり如此水野彈正少弼も都三日路此
方迄参陣くけれい敵ゆ有こ衆も頼て見へ帰陣の由聞及
ひしゆ固て某こ影ゆ待居さりけるゆ如案宰相殿見へ玉
ふ向即出迎掛御目御設こ板申達し其日い某の在不ゆ宿
陣し各を待居けれ如水野彈正少弼も某の此近参陣こ
田三奉行衆被承及(聞)及(及)飛力今度御渡海こ義苦辛労力

之由申入侍るこ然る間黒田清野より長ここ在陣大義
こ由使者可有之旨と思ひ侍らしゆ西くい碁を打何事も
品穏ゆ見へしゆ三人こ奉行衆霜碁こ如水軒待居さり
し陣不へ立寄て遠路為御使者御参陣御苦身こ由申伸侍
れとも囲碁ゆ案し入て挨拶もなおざりく將軍より仰
有りとも無とも聞くひ忙然こされい治部少輔い増田大右
へ目くいせして窟ゆ立出しこ其れをも得知らてためを
も仕しこ其ほし勝負していざくらい三人見へ御通りあき
御設こ逐申伸侍ら人と有けれい奉行衆いまや五六丁も
行のひめと若しを多両人驚きはく先こ帰へられ候くこと
使者及再三くか共先急きの碁を打候へて云つい三人あ
さ笑ふて東第さして急きけり然きとも西くい三奉行衆

へ触るゝ可申達旨あて有りし故猶使者を以是非帰らき候へ
と云へとも役者は向ひ敬ゝは恐ロして後い去かゝ返事
をせさりしこの両人い手もちなしふして形勢の未る
を待居さる甲斐もふく諸人の古頭はかゝり陣中の笑種
の種蒔ふふ兎や角やとせしに間は何きも果策は至つて
帰陣し待れい如水軒彈正少弼い使ゝ抜申渡してよ
と三奉行泉是は出らき候へと云しわ芸曽て参らさりけ
れい断都より引拂ひし泉まのみ申度し両人と三奉行泉
といくとやかふる参会も無くすかゝしくも見へさり
けり此一條様目の泉より如水軒霜基ふとい囲碁を所望
おち待りて萬の評議も宜しくわらさりし由申しかい得
軍慢りおはされて翌日の夜法は近習せし者ふとい盤上
の遊ひ連哥おはい事おはしき事とと深ふ厭ひ玉ひ
き是両人構は案しへ入所望あゝ即用向を等閑はせられゝま
依てと

武日三奉行泉黒田侯野の事を密は後し甚上囲碁中へ
はおこうはしき事を天下は披露し待る事を子息甲
斐守左京大夫腹くろは思ひさめて度い此鬱憤を散
せし事を根深くかそかさう高ルをして有し甚種
い朝鮮はおゆて囲碁は胎み初て終は日本の乱根て
い成はけりおとい博田基おは内高田遠江守は諸り
付りしこ将軍斃し玉ひしかい石田を追失いん事共
を計りけるはしかかとも積りぬる後侍多かりしけ
れい十餘ら條ゝ追失を書立て長岡越中守加藤主

計略黒田甲斐守淡路左京太夫ゟと十余人連状ゟて
家康御前田利長へ訴へ〳〵わい憤りを止くかゝめ幸
の物初めよしとやおほされけゝ治部少輔を江州佐
和山へ隠遁ゟ行ひ奉行職を止らきゝけり石田筑
居せし事を恨ひ国暇の夜ふ〳〵計策を畫一見る
事い更ゟ天下を并呑せんと思ふゟ外い他事なの
りゝとこのや

○木曾刑部宮城攻ゝ事

釜山浦ゟり左ゟ付くあのゟ国と云し守護ゝ木曾判官鎮
守の城主とり加藤主計頭い江原道ゟ西根津守い平安道
ゟ在陣ゝ木曾か国より一揆蜂起ゝて釜山浦と都の間の

通路防しかい細川越中守三千余長谷川藤五郎三千余木村
常陸介三千余山野木進殿介牧村兵部大夫稲葉内膳正太
田飛弾守青山修理亮国木下野守寄合組二千騎都合壱万
三千余騎木曾刑部宮ちゝゆの城を可攻平ゝ旨被仰付しか
ゝ一日代りゟ先手を定め其日の下知い其大将次第ゟ大
方い定り故一番細川越中守先手を務めぬ東策の城ゟ後
さる高山ゟ敵多く陣取をして見へし所ゟいさあれを先
つ追掃ひ其後赤ゝ国へ発向然るへからんとて右ゝ人ゝ
六月六日高山さして上りけるゟ防き戦いゝ共せゝ退散
せしを追撃しかい返し合せ防矢且射はい頻て見頼て退
ゝ不を首少ゝ捕てけり夫ゟちやむゝの城へ掛り持る
ゟ城を囲ちゝゆの城さして退ゝこちやむゝゟちゝ

じゆへ行程四日路余も有けんを急行はとも二月八日着陣ま及べりちんしゆの城南の高山ま何も打寄て評議侍りゆるま各老臣印者を呼び集め評し宜からくと有けれ〻細川越中守老臣松井佐渡守有吉四郎右衛門尉米田助右衛門尉長岡川藤五郎の臣嶋弥左衛門尉其弟又左衛尉宮木新太郎玉井彦兵衛木村常陸介ノ臣木村些左衛門尉大崎玄番允奥村六平牧村兵部太夫ノ臣下野長左衛門尉岡本下野守ノ臣河木九兵衛あとて参りさる各役者共く向て此城ま い近国の勇士共多く集り又河ふき者共数年愛ー置しとふん其ま東策のちやせん〇の西城より落し者共ま能り都会其勢二万五千ばかり着到とのや然れい一旦ま攻めん事叶ふへからに何きもおもとくを評し侍へと有しかい細川の三臣長岡川四臣木村ね二臣大崎ふと申けるい先つ此策を付城柵を上げ弓鉄炮まて射たくめ堀際へ忍寄り其後侍ひ搦を搦く攻入ふい宜しからんや然れい城中多勢ふりをしお勢まて攻かりらん事吾朝まていい思しま寄ら如事ま假昔国人ふれいさて免角の沙汰より及侍へと申けれい各聞伺られ其義然るへく覚く侍るねふりとそ翌日の先ま い寄合但まてありけるかちんじゆ城より十町まりり南ま当て一村あり敵三ま計在ム弓鉄炮を出し見て防きまけりいさあれを追掃を へと下知しけれい牧村ね姓澤田猪三郎（後号次日治左ヱ門）かけ出面ま始らに村の中へ真先ま駆入しかい澤田付きふと て大崎玄番允玉井彦兵衛岡豊兵衛辻久左郎下野長左衛門

尉日平左衛門尉押後て駈入り如あわやと見る所に勝三郎一番首を捕てさし上さり残る六人も城を心懸退るを追と出る所へ掛向ひよき首捕てけり其外追討る首百計討捕凱歌を唱ふるゆて立宮しばらく竹策を付け城楼を堀際る上け城中を見下し鉄炮を打てくめ六月十一日の早朝る結搦をひさ〳〵と搦く投入れ〳〵騒怪を発て搦く義入〳〵結搦を折かけ我劣らしと広合ひ上りけれい結搦多くい折れて手ず〳〵辺り蕩其仞空敷ふり次細川藤中守会弟玄蕃允忠一人結搦の先右る多く歩の石を付け置者城中る乗入る迚い一人も此上(のぼ)搦る上へかられ若し上りさるおかあていい此おか首を絡いらんと堅く制し置上るしかい結搦折〻やらけ上りしを見る人て川と感しゆく偽ゆ〳〵と計りふり頻て塀る手をかけ乗入らんとせし處を城中る鉄を長力を以て突落しけれい痛いしや堀底く落るゆり

或日其表るおあて一こ働きふるへきて鬨聲暫し止まさりけり

結搦の製意て無か〳〵故意く撰し其日い金得に剝く石垣る落て死し弓鉄炮る中り疵を蒙り死るも有り〳〵い弥る勢る成り〳〵て如斯るていく〳〵攻しも若き事るふん侍るへしや先こ陣を開き重て行(ゆく)をかく可相攻て手足の人こを先へ退け討死せし者をい焼て取きこ月十二日こ未明る陣揚ひして十町計り退し頃疾風暴雨頻りる降り来り篠を搦くかの如くる有り〳〵かい敵

も進いんともせさりしかい安くとちやすんま帰陣しる
り

洋日此度も八幡大神渡海し玉ふて守護神とふら
せ玉ふまや若大雨無かつせい敵追ふ事も有るんた
も待らい為き事もやと出来んの
在し秀吉御被及聞召以て外立腹く玉ひけい度くま蝿
を拂ふより安く敵城を退治せしまちくゆの如く堅固
ま籠城を遂めれい為き全く侍れと思ひふん後日患く
猶有りとて都表ま諸勢を悉く引取木曽か城を一旦ま攻
假へしと被仰しかい都より名こ東策表へ引取くまし
人馬の息を休めおけり備前中納言殿へ六月廿一日こ夜
何も寄集り軍評定有て攻口を定らる木曽到宮も其

有増を承り今度い敵日本到兵を撰集寄せ来るとや一定
大事まて有へしと思惟し唯籠城を堅くし年月を送り見
んとの交度ふましとうや攻口い闇まて及て定けるま軟こ
南ハ毛利右馬頭日吉岐守ま子丑こ方ハ西摂津守寅
卯こ方ハ黒田甲斐守巳午こ方ハ加藤主計頭清正て伺も
竹策持楯亀甲それ〳〵の攻具太夫まして仕寄けるま仍て
主計頭所場い堀際へ六五間ほと隔りまけり然る處ま備
前中納言殿も可被攻とて六月廿四日嘗表ま着陣し玉ふ
主計殿陣取い高き所まて大将の陣ま可然不ふるまより
秀家ハ渡一可申旨清正申されしかい諸勢も尤の事れ
ふそ侍るこさらい仕為を然軍とて助可申と云しかは共
清正いやとま合力い不入假令等如前こ仕寄假程い各仕

寄せ初相止り得と云ひし右手より付て次第くりと揺って
黒田の町場を三分二程清水屋昼夜労力し中〻大かさ前の
仕寄程より城除く付て埋草を以て塀を埋め平地と成りし
所より城中より松明を投焼きとなりけり竜甲と在りし者共も
堪かねて引揚ひ次翌日又竜甲の焼け残り揺へ六月廿七
日塀へ付て寅卯の方の石垣の角石を引落しけれい櫓傾
きぬ城中より火を投け鉄を已の打揚
お揚せしかい其日も空敷暮よけり翌日又竜甲を弥
増に同和の角石を引抜くと等しく櫓崩れしかい其日
より主計頭が勢い辺入けるに一番に庄林集人依が籏二
番に森本伝左衛が馬印飯田覚兵衛三番に黒田甲斐
守母衣〻者後藤又兵衛三人伝を離れて集入り此軍中の
人〻是を見て偖も見事なる見物かなと感しあく
りお西が勢い石垣を乗て城に入加藤が勢と入合はく先
を争ひ傷負しもしい決せさりしか後い主計頭先陣に
そ極りけれ木曽い能兵共多く引き連切て出戰ひしか共
新手を入かへ攻めしかい終に落去し木曽い秀家の
居岡本権之丞に討ぬ其外に浮勇士とも或い討死或い
痛手又い生捕られ者く敗北せり都て首数壱萬五千三
百程或ひい岩の上より落て死し或い大河に溺死し都合
二萬五千余人空しく成りしとかや

○漢南勢為救朝鮮之急難参陣之事

文禄二年癸巳二月十一日漢南之勢五十萬騎参陣し都
より西大河を渡りとし要害を構へ夜の中に塀の手を合

せとり多勢よりはさらに鎧り返てそ見つよけ新犯囲め
ふい手間も可入と柴いさ押寄せて打破り宜しからんと
相談し同十二日の暁天より四方より押詰め二のたまて四
入大花を散らし相戰ひ押しつ押さ此り時い但打成い進
詰め首を取る有り捕へらるゝ有り多勢よて心を一致し
て防き戦ひし故義去る色も無く日も西山に傾きしかい
先つ帰口を可入とて引退き都邊より陣を固めよけり夜明
けぬれい又今進発山取をし国より軍を固め塞くる陣の
備へ宜きよ合ひしを大明勢見れはしかと小勢と云くとも
軍し法理よりあへ是始終難拘とて十三日に夜退しか宣
よ五十嵐勝の大勢を音も形なくいつの頃退しやらんも知さ
ぬかい暁天より伊賀の忍の上手をもし見せしかよ中に
多勢の事い云はもなかいに一人もなく掃除迄仕侍りて退
きしとなり同三月六日濃州岐阜中納言信秀卿名護屋
為御見舞御参陣有り所供に人らまい寺西筑後守山田又
右衛門尉百騎越前宇津呂弾正京大夫高麗渡海の事
なれい此新宮へ入申され給う外ある所駆走ともふ
り此信秀卿い三位中将信忠卿に長子信長に嫡孫
ふれい天下をも可被知在人なり
評曰秀吉卿此卿へ天下に家督を譲り玉ひて徳子孫
よ傳ひ秀頼公も栄久よ其名も芽しらくものを
人敬と云ふくせもめよひかれて奇次公へ譲り玉ふ
事道よもあらしのく損益ひもさとくして道を知
らさるい後世も皆此子孫も絶其名も清く偽いら

同十一日丹波中納言秀勝其勢五千騎の着至まて名護屋へ御見舞として参陣有り山口玄番允伺し待るゝ即ち丸の内へ置申され親しき御振舞一かさならに見へし其黄門い秀次公の御舎弟なれい斯く待るゝ実に宜まおや

○於朝鮮國船軍之事

文禄二年癸巳六月廿三日より夜釜山浦へ打上り休息せしむる翌朝熊川浦へ番船多く有由注進有けれい毛利吉岐守所へて彼表可相働一ケ之評議有り当城より番衆より義酒佳肴を送り来りしかい是を便としていみしき饗膳過ることさらハ互のおもいくを被仰假得共九鬼申出しけれて何ども辞し合ふて評議遅かりしゝ處に藤堂九鬼と両人云けるい明日ゝ先つ物見の疾船を出して番船の様子聞届大船を押寄せ大筒石火矢を以打出くめ其後無埔ふい宜しくもるへき旨とふり何ども承り此義可然候いんや去共奉行衆いかりハ思召なやと有りしかい是又同事ゝ宜しく待らんとし然る處に加藤左馬丞進出各一ハして右之趣宜しかんと同しゝ玉ふを斯申せい多分之評議ゝ可相隨ゝ申定めを違背之様まかいしませ共又存寄ゝ事を申さはい將軍の御名聞かふ如何あらんやと有し時奉行衆被聞届いや〳〵兼ての定めゝ宜を承へきこめるゝ事何ども両人の存分ゝ趣へて宜き事の無ましも有へからいとく〳〵発言頃れと被申しかい加藤さらい申し見人として辛島ゝ番船数百艘並居とる共大船を揃へ大筒

石火矢を以ふ星さめくとせい又其浦を逃て往ぬ〜し唯船
軍を挑まんとの事まてあらい中船を以気秋ひ此方をよ
いけま見せ亘舶図をけひ噇と集捕ふい宜人侍うんとこ
満坐是い猶一理有り何きも左も有へからんと思いるい
鮪も有り又我か云出しくとるよう参増され其ほれてはさ
くりめま中船まて会秋いせふい即時ま集捕至う貴へい出
む氣色も且見へはい各息はは人て言の葉も無き所ま脇
坂中けるい左様まかさおもむはましてい兼ての考めも
益無し如何有らんとこ此言ま付て何きも左馬丸さし図
を以ふむ氣色多け彼い重ねてさきい假陸の勢つすや二
ヶ所までの手柄も有けるま敵船を見る度毎ま大簡石火
矢まて威しいふせい時軍 被聞召船手く者共い敵と戦

ふ事いきうひまて有やうん敵船ま出逢ふてい威としい
ふをるを本意とをるまと御噂し玉ふ共各へ申をへき言
の葉も有まし乍去評議を盡しいつきも宜くきま随て香
船を追往せ假寄合い被御上假いんや其い斯ふそ申はり
けれと肘を張りて謂い如れし時藤堂脇坂奉行衆く對し
被申けるい此評議い安大事まて假此船軍仕損し假ン
陸く陣をはかくしかし然間大事ふる評議まて待ると
や奉行衆も此義まはしくさる氣色ま見へくしかい又左馬丸
云ひけ表い香船を見てい追往せくいと者時い唐堤迄
も追往假事まて有ふく假也謀て無邪へおびき入る事
と有らん敵も勇ふそ無らぬ左様の謀計い深かいるを
う共へ假もし順風まはかせ行方知らい蔭行事も有らい

千悔共とも益無るへし一度も二度も敵はさりける人い
とまれかくはれ武の道い其期に臨んてい師傅もいらに
又君命を用ひさる事も所に因て有る事多く猪武者とや
らん云事も我等い不存候番船を威し往せんとの評議に
い一向同ぜましきと眼に角を立理強に見へしかい爰に
至て脇坂と既に同士軍せせんとしくめきけるを両人の間
に各色り入り是いしかるややとしさめけれい加藤いし
ら奴鮒に持成(もてなし)し人そへへふる事いとはしく候御心易の
れとて其一鮒おさやのふり吉岐守も亭主の事ふれい接拶
を申けるやういか様ふる評議い何時も損益を爭ふ義か
あらはう事ふり今日向に限らさる事に候何とゆめき
將軍いおき人を持後ひしはやのし遠國にして斯く君ら御

為を命おかけて云侍るい大切ふる事と覚へ侍りきいさ
一種一新し船軍の祝ひせんとて盃を出し無有り盃度し
めくりた馬外と中務大輔と和無してけり斯くて船軍の
義大隅守被申也候様ふと満座所望在くかい御理に侍る
まい申見人とて如相定先つ明朝疾船二艘宛出し廣島の
鮒を見及ひ大船中船の用い時し宜に随ひ能く候いんや
船い何き共夜半に押し出し可然候い人数を去宜き指図
と候て被仰候へと申けれ其儀ゆいふむ鮒も無く此義
に相究りけれい各色帰り船拵し明日の用意何こて勾る
内に夜も更け夜半の鐘も無船に至りしかい何れもいさ
いと後へと船に取り乗りさし出くまけり程ふく唐島に
至り見るまもや物見の船潛戻り番船ちそ三百余艘程瀬

戸口より並居たる二手より分り山の麓より除ふて半分沖ふる島より付て半分見へ申候脇板物見の船口有て残りさるべらく番船より廿町も此方より浮みさり左馬丞二艘の疾船是を見て在れいたの疾船小脇板数丈衣の者と見へさりいさたの船て一所より在らいやて艪を速め傾て押並らんさり加藤か二艘の船一艘まい墻国右衛門尉藪典左衛門屏東勘右衛門一艘い宮河三郎左衛門白田三郎四郎平野忠右衛門其外一艘こい何村権七郎土方長兵衛等を向さり奉行衆其外九鬼嘉隆下知して曰御余まりいつて事いし仕損ぜれ先大船を寄せて大筒石大矢をいて打たくめよてを勾けり左馬丞進み寄ていやくた様まおたくめ佐いい敵船中より堰へ申間敷程まお舟を以て弱しと会釈ひ其間より大船を押寄ぶい乗捕るへしと覚へ候こと身を打くて謂けれ共二人も同心の輩なけれい不及力より苦しき敷事のもと浮沈せし顔さし以し外ふりかいけるおふしなれより浮みて敵あひ近ふ見るは西しくた馬丞しか性の者とと見へくい僻目敷た様ふらはつきて戻り候へくと各へなりり理りはく敷船を離まけり加藤心より思ふやう目出度と方便り敷船を離れさるよと歓ひあへり伊い艪を疾めしかい漸く国右衛門宮川か乗さる二艘の船二三町より有らくと思くき時船望まはつ立上り馬印をいてひさ振りより待るを二艘の船こ者共見て潜戻り候へとの事歟又かさり候へとの事歟とまちくなをしお国右衛門云やう戻きとふらい幣を招くやうに振り

はふくゝ敵の方へ振り玉ふゝかゝきとまてさて待るら
め先つ艪を立直さというてけり左馬丸孫ゝ近ふ成る随
て大音聲を揚北より三番目の船を可金捕と其分心得候
へとて身を打くて急けれ躰凄冷き分野ふゝ敵船近く成
るゝ及くて北より三番目の番船三百艘の中より出一艘
左馬丸船ゝ潜向ふ斯く見けりと等しく島山ゝ添居る
番船を押し包んてさし詰め引詰め射る事車軸を流し雨
の如し一艘しの番船力を得三艘を射る事甚以夥し左馬丸
云やう敵船ゝ間五六間こい過ざるぞ鉄炮を揃へ仇矢
無きやうゝ心を鎮めて打てよと下知しけれいかゝ
め鉄炮をけるべき鯨波を噇と挙とうけり見る間ゝ番船
い水主共らゝ者将棋例ゝをるかゝくはゝと廿人計
り相倒され是ゝ僻易し艪を引入き弓を投げふん見へ
く慶左馬丸大ゝ眼をいからしやれ船を着けよゝと陳
遍間もふく下知しさりけれい水主共一除精を出し船を
番船へ押並へさり荻作左衛門射打鍵を掛けさりしかい
敵より切掛ひゝ　二三度しさりしを左馬丸もかけて
手入らんと心い到ゝ勇めとも矢二つ三つ中りて其身も
会期せず海中へ落入らんとせしを水主共中うゝ抓んて
引上さり作左衛門一番手ゝ捕うい者と云つゝ乗入さり左
馬丸も起上り使て乗入けり宮川三郎左衛門戸田三郎四
郎もさい口惜とて三番ゝ乗入さり痛いしや加藤忠次郎
と云し者い行年十六歳ゝて其心勇まやさしかりけれい
左馬丸身近ふ寵愛せしか作左衛門ゝ押使して乗入らん

てせし處を射倒され其身い海底ゑ沈むと云へとも名い
雲上ゑ浮さりけり河川権七郎土方長兵衛押潰て生捕け
り伊治郎兵衛義典左エ門東勘左衛門中島勝左衛門其外
歩立し兵十五六人として三艘生捕ぬ左馬丞生入し船ゑ
敵一人も見へれ何方へ散乱したるやらんと思ふ所ゑふ
み板を上け見れい船底ゑ打入ておぶ〳〵と引きしほ
り待りけさり何共さへきやうも無くなめらひける所ゑ
左馬丞曰何とおくれさるそや退け生入らんと怒りしか
い土方面々ふらは太刀抜連れ噇と入しかい中〻矢をも
放く得さ手を合拝みぬるを撫切りゑ伐つて首を取り或
い肘を打落されて海へ飛入も有り切て捨るも不便こと
思ふをい助て艪を押さるも在り或い水を得ゑ逃る
も有て十分一い助りまけり脇坂毋衣こ者も一艘生捕ぬ
土方生捕りし船ゑい三十一人在しか二十三人手負一人
打死こてけり加様ゑ諸人を用ゑ立しも稀ふる事ゑさそ

評曰日域こ到兵い窮鼠却て猫を噬こ働在り朝鮮人
引さらを放さざるい素性怯弱

筒勢ゑひかへさる大将共左馬丞か働を見て楫を直し櫓
を疾め身を打入て急けやゝと勾る聲影こ奉行衆い何の
命らけの加藤か働を見ゑやと噇と高聲ゑ感しけきい殘
る衆い心地ゑしけゑ見へてけり左馬丞い隙い明帰るて
て筒勢の面こに向て云けるいあきさる番船さくさんゑ
おいしまけそ急き生捕玉ふて大の忠節ゑ將軍へ御注進
假へ油断こ玉ふと云けれ共安へさりやらんとかむる

聲を高し吁嗟さはしかりし事共也

○加藤左馬丞感状之事

唐島において番船三百余艘の中へ加藤か船只一艘乗入る事實に古今に絶したる手柄を盡すかり御感尤甚し此外に致忠節たる旨注進在しか共、将軍其閑度を盡されたる馬丞御感状有其体に曰

其方事天正十一年夏於江北柴田合戰之刻突一番鎗、其働揭焉為御褒美、一度令加增、早令假亦於朝鮮唐島番船数百艘之中離味方類船、乗入乗捕敵船数多之手柄、其勇功誰か立ち比ん下手殊於順天蔚山両城、可引入之旨各雖令連判、就雖見棄於加藤主計頭等、不及加判之旨神妙之至御感不斜也、依茲手前代官所有次第三萬七千石令加增、早本知合十萬石之内壹萬石者被御闕所猶以可被加国主之条重命可抽真忠之状如件

文禄二年　　秀吉御朱印

癸巳九月日

評曰左馬丞事番船三百余艘之中へ唯一艘乗入らんとて莫大い類船を離れ行く心い剛能く其身に代つて思ひ知るへ一将軍感状い辞い有餘加增い地い不足ふる歟信長公い感い返之

○蔚山城戰之事

惣軍勢都より引取しかい今い蔚山之城敵付之方と成る
けり然る間北城を拵へ加藤主計頭を籠め置然るへからす
さらんとて癸巳十月十日より諸勢をよせ普請をそ初め
け表櫓ふとも大方調ひしかとも外構へ三之丸ふとい断
し塀之手の合ふ所も有り未合所も多かりける折節敵北
申を承り詳しけるやらい城の普請等も成就し主計頭籠
りふい手間入るへしいさ北城を一旦は破却し置しから
んとて文禄二年十二月十一日漢南勢五十萬騎朝鮮人も
加りて攻ほろはさんとの催しふり又其由日本勢へも告
げ知らせる者有て間及ひたるもの有る事もやと云つかろ
き仆假の馬上二三十騎出しけれい猛勢之中より駿馬も
雛を拳百五六十騎駈出引色くて討んとしけるを断しも

迫れて退きしかい中之出て合戦しつへくもを見へさりけ
り兎やせん角やせんと云も果ぬまや北の方惣構を捧
み破り三之丸迄乗入りし所に浅野左京大夫自身鎗を合
せ突出しけり雖然新手を入替〳〵攻込〳〵透間をあらせ
さる事寔に信長公之御行もを髣髴さり三之丸を守護し
毛利右馬頭の臣冷泉民部太夫元光い於毛利家事急成る
時い必勇敢之役さり今度も亦普請等未究ふり外構を可
守旨山早川筑前守隆景より觸来りも民部大夫固く可守
し条被安心儀候へと返答せり斯云も果ぬ漢南勢手を
合襲ひ来りも冷泉手之者共を左右に隨へ喚呼て大花を
散らし相戦ふ事数刻に及べり然りと雖とも或ひい戦ふ
労かれ或い討死し残り少ふる見へし虜に敵い孫勝に集

して攻入しかい民部大夫手元より進む敵等を十五六人長刀を水車の如く廻し薙き棄て阿曾沼豊前守と一所より討死を遂げさりけり左手書手よりして二十余人枕を並べ討きめ白柏善右衛門尉伊賀崎又兵衛尉書安太郎兵衛尉い其折節在他所討死せさりし事を年本意思ひ元光其外を取納め其野よりして終に腹十文字よりかき切て失ひけり

或曰土ところ者かやうの義を守りしい大功多ありよりて討死せし士二十余人追腹せし三人姓名を記し冷泉頼ぶ久雲州黄が島清龍寺より寺領を付其身元臣共に位牌を受けり其後堀尾帯刀先生吉晴迄 家康公出雲国忍賜入郡に御此寺に由来を聞武に道深き事を感し優くも先規に如く沙汰せらるべき古へ出雲国を毛利依為分国如此云へり

偖て浅野左京大夫い乃鉄炮を多く寄せ大花を敬らし戰ひしを加藤遠江守云けるい浅野殿い將軍御親しき中なり急き本丸へ入り給ひ可然候いとていさめけれども他へ譲りこしたるに在つて相働き下知なるとおらかなる方を有つへうを見へて神妙なり主計頭い西生浦と云ふ所よりしか蔚山の城構なるを付て好みしの軍を有り又普清等大夫に有るやうに心遣ひをなせよやとて加藤清兵衛を遣わし置しかい嘸難義に及ふらん是を我為に より其上彼城落去せい日本の弱みなるとあれ彼へ手途ましてとのり成りぬ甚しさ敵い見んとて急き船に用意を船奉行梶原へ申付しかい頓てせんさくを遂せめていい十

艘計りなる形と思ひ侍れとも断て五艘有其由斯くと申せしかい其義ならい人を撰み集せ候へしと在し故庄林隼人佑其他法師及て二千余人撰らみ出し汀より出て沖を見れい香船数百艘蜘の子共散らしとる如くなる水主楫取等見驚ひて震ひおのいきつい何てしてあの中御通りあらくや及ひ無き事ふんめり命知らぬの人哉とつふやきぬてゆらして涙やらぬ水主共多かりけり主計頭其中にて言葉ないちいちみ顔ふるをふ姓まて有り飯田角兵衛より向ひひなの大ぬちの大男共是へ具して来きと有しかい左右の手を引張り主計頭の前へ引居さり清白日唯今の過言時も時ま去てまれ我を初め命有へき共不思ぬ汝一人向ひて独先つおのきを先ま立て人と云ゆ〜拔かい玉散るむかしなる刀共ぬてはを挽きさいろみけれい彼大筋付さる水主以の外驚きはく〜年ま御助け候へ御船を出し一陳早め可申候と詫しかい哀まも有り雀助けまけ〜此男軽〜と船ま飛入り急き集らせ後へといらてしかい吁大時さるのれさそ貴へぬ残りの水主共是を見て我も〜と船ま爭ひ集り各〜急き御召し候得と聲こま進みける清白不斜悦んて門出吉兆そ急けや者共と大ま笑ひけい五艘の船ま取集り囚を拳て押出し一里けりなる出し所ま香船五百艘漕寄せ引包こ一揉二揉みもの物あらま悲りし所を其中代真一文字ま漕通り剣へ敵船二船集り捕撫りま海へふき入けり夫より主計頭の籠の船代見ていい敵船の者共中代明けて通とし〜のい無難蔚

山城の後攻を遂げけり六七十萬騎の猛勢共清正が籠り
こ者を恐れてや有りけん正月三日に夜退きぬ城は大軍の
事なれい其鳴音も高かるへき事なれて有しか夜中は音も
無く諸道具ちと取繕しさる事も無くて退きしさそさた
が大国の軍法宜しきは叶ひ正士而已権柄をとれるはよ
ろ感ふるへしと思いれて上杉佐竹信に事思ひ出られはけ
り

評曰加藤主計頭清道の至剛深く思ひへて奈玉ふ処
に六七十萬に猛勢清正一人に勇剛は因て退し事
叶授羣成哉或曰一人に至剛は衆士ひのれて得に大
利事有と云は亦道理也

此時蔚山の後巻い毛利右馬頭輝元の長子右京太夫秀元
後攻ふ
秀元大将さり輝元の居宅戸備前守　浅口彦左エ門　此
両其頭其外三刀屋四兵衛　冷泉民部太夫　阿曽沼豊前
守　等軍勢都合二萬餘騎蔚山城は前廉より籠め置しは
り今度に毛利先勢い小早川筑前守隆景　吉川藏人作
久留米侍従　立花左近将監　等其勢四萬余騎右京太夫
筑木二萬余騎都合六萬余騎に軍勢は文禄三年甲午正
月元日慶南勢は対陣せり翌二日より先手挑合戦に小早川
吉川　立花　先登を争ひ相戦ひ首数千討捕りぬ然る
慶南勢難得勝利と思ひ此ける三日に夜逃退きぬ此
趣名護屋へ注進有しかい秀吉公殊に外面機嫌宜しく先
手に各へ御感まて二月下旬右京太夫方へ御感状有

毛利右京太夫殿元感状　後〻被叙宰相

今度漢南李郎郎　碩郎郎　西將軍引率百萬騎之軍兵朝鮮國之為救急難俄然令出張各及雖義勢陣軍勢周章騒動評定區々之處其方為先勢一挑合戰即時伐崩唐人首三萬八千余級討取唐人令敗北之由委敷注備前中納言所注進之趣被聞召屋假　小早川　吉川　之花已下古今之至剛武勇不始于今假其方雖為若年無比類被思召假殊蔚山　加藤主計籠城之砌茂後詰数万之軍勢引廻し両度之働神妙假孫可抽忠節假猶帰朝之節叙官位可被加御褒美者也仍而感状如件

文禄三年二月廿八日　御朱印

毛利右京太夫殿

○加藤主計頭清正都表へ勢を納る事

主計頭九良哈覽ゟ近付き度し合戰を挑み村家里屋悉く令放火猛威を奮ふ事甚以夥ざし斯くて金山と云ふ所ハ地之利宜しきより要害ゟさしらへ加藤無三右衛門同組其勢三千人馬廻り二人都合五千人并播中と云城ゟ九鬼四郎兵衛　天野助左衛門　山内甚三郎其勢三千人籠置主計頭ハ咸鏡道ゟ至つて勢を入き近邊〻百姓等如前〻還住をさせ撫育し変情をゑ〻庶民年〻暮ゟ

成りけれども越年し便もなしいかゝ致し候いんやと花しかとも其求に應ぜへき行方も無かりしかい酒肴なと施しけり主計頭思ひも寄らざりし敵こ中よりおゐてしづ心なき年玖越へ一所に都表へ一揆等令蜂起金山浦への往還困不得自由都に在衆中一件儀し主計頭を呼ひ戻し可然とて備前宰相秀家元三奉行衆連判にて書簡を認め早と引返し都を守護し可然旨 則正月九日飛脚到来ぜ主計頭後り尤とゞ引返し候いんぜれ共金山橋中こ西城へ残し置ける勢ぜ引取ていい不叶事なりとて咸鏡道より齋藤立本床林隼人佑 竜造寺又八郎 勢こ内を引分二千五百人都合五千人共三右衛門か迎てして出しけり清正も押後て急きけれとも餘寒甚しく河水氷を流し春雪ゆゆみも無けれい心向已急ぎして駒の足並後やのや日数断く積りて正月廿三日先勢金山へ着陣し見きい敵兵如稲麻竹葦打ち囲み攻ぎけり然ち所を齋藤立本下知をもし喧と突掛りしかい籠城こ勢も突て出て相合せ戦ひ追崩し三千余討捕へ如斯して共三右衛門いかまと向ふ敵等ぜ来り攻へんとせし時突て出追散らし勢ひ乗し長追ひせし所陣を取切られ討死し平 伊藤勘平 井出市左衛門 其外百余人左右なして合討死 存命者ぜ千死一生こ期を免かれ各へ相見へ候と云へい長ト久弟等を討き悲むも有て哀乗自然と立本隼人い討死せし者とゞこ骸骨ぜ灰なるし翌日心こつかる陣拂ひし都路さして引なけり清正い二月五日に都に帰いり翌日一揆原

楯籠りし在くへ発向しかの六日逗留し悉く伐盡し帰陣せ
しかい洛中樵る昼夜を安くしけり
○小西摂津守於平安道振猛威事
小西行長い遼東ノ界平安道に至つて勇威を振ふ事恰信
長公天下初入し猛威に髣髴たり 北田将軍 被聞召及
深入し越度を取るかと再應制し可然地を見計らひ数
ヶ所要害を構へ永く可在陣し行不可有油断とかり然る
間小西に無力せし吉岐侍従対馬侍従有馬刑部卿法印
大村新八郎 五島若狭守 行長が第主敏々水に作右
衛門 其勢二萬余騎 小西が要害を大将軍と定め真
中なる二ヶ所に要害を構へさり 都より北表に
至つて百五十里繋きし城ろくて通路無覚束とて大
友宗鮮 二ヶ所 黒田甲斐守 二ヶ所 毛利右馬頭に先手
小早川筑前守 七千 吉川右衛門尉 三千 柳川侍従 二千
是等をして三ヶ所凡そ七ヶ所に要害普請よきる
次に在陣し躰数年を経へき分野なり
将軍 より の控に小西も難義に極りない大友助
成なくし急難を互に救ひ可申とかり 斯るとき大
明より朝鮮の急難を救いんかため 李郎耶 碩郎耶
両将軍に百万騎の勢をあひ添へ文禄二年四月廿六日に
西か要害をいく重ともなく取り囲みけり痛しや摂津
守い籠鳥の思を焦し千死一生の身とかりぬ 慶南勢国さ
み屋く扉風を立さるかく千重二十重に押寄取巻きし
を味方の小勢に鉄炮を放ち備へ空矢に射て迚と不

通道ませまれり心を一致して苦戰せい子死一生と申
し有べきそと下知し相戰い一人して五十人三十人さそ
ぬりまゝせんれ何程討きさ始をも事ともせを岩を立
てかしかくるやうまに戰い未わりけり木戸作右衛門わ
勢ふるをゝ不顧數度返し合せ敵を追拂ひ小西を退け
るまた友二ヶ所の要害まわ西い大を掛里田が要害ま
近付きけれい甲斐守出向ひ之やうい大友敗軍し時小西
拙い僅南勢幾重とも多く取り囲み打ち果し候基まゝ
退候へと云捨て退しふり去共西の行衛無覺束まを因つて
出向ひ如無志殊まを數度返へ——合せ苦戰せられはち
申至剛とりう申まを及ひれを候いさいせ給へ飢を補い人
てて飯をいとふみ人馬飢近まを次次しけり是まりの殿い
里田せんと有りうふい基が勢い変くの戰まを労れて候ふ
り是よりい兎ゝ角ゝ御まを任せ候とわ西い先まを退まけり
里田の居後藤又兵衛頃て殿の任を受取り務めけるか
進退自由を得し事寔まを猿の樹上まを在るが如し兎角
して都近邊まを帰しかい名さし会ひ軍評議有りしまを立花
左近將監いとまれいくまれ合戰まを究められ宜く伺らん
と言を放つて申けり甲斐守無志殿をし退けて輝元先手
ふる毛利七郎兵衛尉（陸奥守ふる）　粟屋四郎兵衛尉　桂宮内
大輔　井上五郎兵衛尉へ如何可有ぞと云しかいもやく
殿を請取候とて五千余騎まを入て帰り稽り蜘手十文字まを馬
を入戰ていか共終まをまくり立らき引是まを見へし處まを立
花左近將監面ゝふらに横絡まを突かゝる爰まを押詰めかし

さまに聞き散じまに相戰ひ終ひまに追ひ崩し悉く討捕唱凱
歌けり都まに在りし二十万騎し勢北由南と等しくいさ救
ひ見人として一騎駈まかけ出三里四里まして止りつゝ其
其手の勢を揃へ既まかゝつて合戰を挑み立花が勢を救
いんと思ひまに計れとも増田 石田 大谷 四一人まても
出でず戰ふまる將軍や斯制し給ふ時書昨日到着せして
大し眼まに角を立制しけり秀家〻軍旅八番目に次茅ま
れとも目前まにの勢を見棄ふい必定日本の軍後まはか
はかゝかし御法を用るも破るも軍まに勝人為まり唯かう
て救ハもと備を崩し一度まに喧とかゝる合 立花左近將
監が戰ひつる樣鏃まに突掛り東西まに切り伏ひ南北まに追ま
ひけ相戰ひまかゝ共立花が勢い先きを先きまに追崩しけり

時方勢是を見て方〻より蒲倉来ゆゝ三萬八千余討捕
まかい則目鼻をそぎ殿下へ各連判を以って進上し奉
りぬ秀家助勢し給ひし戰功尤甚長せり
評曰是を分目の合戰といひ立花が成
功に至り朝鮮陣中是まに比せへき形しは左近將監
是非共まに合戰の上まに非をしいかゝかるふんて遠慮
有りし事又まに敢き事形らんとそ

○三奉行諸勢引連都へ入事

三奉行し人〻一秀家下知城不用して合戰まに越き給ひし
事を奇怪まや思ひけ〻諸勢を引具し合戰の勝敗を見ま
聞をせを都へ出そい入まけれ秀家〻軍まに勝て本陣まに帰
り明石左近 木梨九右衛門 の一番まに討捕一首材見

せんと三奉行捜尋れ[illegible]かとも也や都へとて帰りさも無し夜も更け十方(トヽら)まくれいかゝ今夜い見る陣取てしやて思ひけれとも三奉行より将軍へ何と於注進たる事も有らんとて支の刻より都へ急き入りしかゝ夜半の鐘聲過まけり秀家 右筆 まて待る 楯村監物をして注進状を書しむ

卒以張力致言上候一昨朔日濃南勢百萬騎至于當表令出張加破十西摂津守要害既都邊進来輝元毛花等挑合戦在勝負也甚雖欲為助成三奉行御停止之旨達而制之雖然於無助成者悉為討死無疑之然間不用三人之下知相拔遂合戦得大利三萬八千余討捕之早此旨宜預御披露候恐々謹言

正月二十七日　備前宰相豊臣朝臣　秀家

安威摂津守殿

西人ゝ飛脚ゟ君御尋し事有之らい此事を申せよとて一軍評定之時濃南勢以ゝ外多勢なるゟ合戦ゟ相極可申旨と毛花堅申候處筑前守隆景尤成る旨同心ゝ事一輝元先勢引足ゟ見へゝ處立花左近将監突懸退崩ゝ候事

一合戦ゝ勝負をゝ不聞三奉行諸勢を引連都へ迯入候事

此分慥かゟ申候へとて遣いしけり此西人夜を日ゟ徒て急しゆへ二月七日至千名護屋けれい安威摂津守披露せ

一虜将軍悦び玉ふて飛脚の者呂して来れと有しかい攝
津守庭上ゟ置め　殿下立出給ふて委しく見聞し事共静
ゟ聞きと仰けるゟ若へ拳る
一左花　小早川ハ合戰の上ゟ働らきもしい大利い有まし
、と堅く禮申しとゟん
一毛利し殿ひし先手花く見へし時立花左近返し合せ大
敵をゟ討候ひし
一合戰ゟ備前し者かけ向ふを見て三人し御奉行衆都へ
向ひ接鞭を打て入玉い候ゟる
此外珎敷事誰共ゟしゟ申けれども慥ゟ見及不申候
せ
将軍聞召不斜御氣色ゟて飛脚の者両人へ銀子指枚被下
五六日休息させゟ御返簡い早道し者を以可被遣旨
仰けり
御返簡二日
去月二十七日ゟ飛札昨七日到来先以令大慶候大
明國より其国廃乱を為救李郎耶碩郎耶百萬騎を
引率し令出張小西か要害を揉み破り既ゟ都ゟ
近付毛利右馬頭か先勢と挑合戰一勝負臣々成
ゟ依て其方日明を以軍法を破り鎗を入即事ゟ
突崩し三萬八千余騎討捕之由其戰功不可勝計
寔助成無之者立花左近将監ゟ討死し到都押詰

の籠城し躰ゟ成り申い後巻し加勢重而可遣ス
大功成ル忠義大ゟ覺へ候事
一三奉行共今度合戰を制し留め候義似合とる存分
を云者ゟ不及是非事ゟ候向後我左様聽し
とる下知を相用イ被申間鋪候事
評曰三人ゟ内有武功者一人可被加事理ゟ當然と
ゟへき歟信長公いか様ゟ役ゟい猪子兵次野ゟ村三
十郎ゟと被遣しゟり
一立花左近將監小早川筑前守い非ス合戰之上ニ百萬騎ゟ多
勢ゟ得大利事有間鋪ゟ令遠慮其段強而申達せし由
得其時宜思慮不始于今義ゟ候又味方合戰を色何しく
見へし所左近將監突かゝり多勢を突退るゟ由武勇ゟ
甚鋪ゟ候事ゟ感狀遣し候いてまい先ゟ其方能きゟ意
得可申達候事
右條々如件
二月八日　秀吉御朱印
羽柴備前宰相殿

48584
0791
15縣
16=5

縣立佐賀
24.11.18
圖書館